

「自分というものへの気づき」現象へのアプローチ — 児童期後半から青年期にかけての自我体験の報告から —

天谷 祐子

I. 問題と目的

「どうして自分があえてこの自分なのか」「自分はどこから来てどこへ行くのか」「自分は他のなにものでもない自分である」というような、「自分というもの」、「自分という存在そのもの」に対する疑問や気づきが、児童期後半から青年期にかけて顕在化する現象—自我体験—が見られる場合がある。本研究では、この自我体験という現象に焦点を当てる。

今まで、自我体験についての研究はほとんどなされてこなかったという現状の中、天谷(1996:卒業論文)においては、大学生を対象に面接法から自我体験を引き出し、自我体験の様相を明らかにしようと試みた。その結果、大学生から自我体験を引き出すことができ(体験率約30%、自我体験の初発年齢は小学校高学年から中学)、自我体験という現象が確かに存在することが確かめられた。そして、自我体験の体験される大まかな実態を把握することもでき、自我体験の概念的定義・操作的定義を確立した。自我体験の概念的定義としては、「自分というものを対象化して見るができるようになった後、自分という存在についての問いかけ(例:自分の存在とは何だろう。自分はどこから来てどこへ行くのか。)や、自分という存在への感覚的違和感(例:この姿勢を持つ自分が本当に自分なのか。)が見られ、問いの答えを見出すための思考が見られる体験。中には、客観的に存在する自分、周囲と一線を画した自分というものへの意識に至る場合もある」というものである。

以上を受けて、本研究では、自我体験が体験される年齢の直後に研究対象をしばり、自我体験を引き出し、その体験される実態を明らかにすることを第1の目的とする。さらに第2に、自我体験の報告の発達の様相を調べることを、そして第3に、自我体験と関連する要因を探ることを目的とする。

II. 研究1

<目的>自我体験が体験される年齢の直後である中学生を対象とし、面接法により自我体験を引き出す。そして、自我体験の内容・自我体験の体験される記述的内容(自我体験に至るきっかけなど)をより正確に把握することを、研究1の目的とする。

<方法>対象:中学1年生から3年生の60名(男31名、

女29名)。手続き:1対1の半構造化面接法。半構造化面接を行う前に、自我体験の例を集めて作成した質問紙(評定14項目+自由記述)に記入してもらい、その記述内容を基に面接を行った。面接で明らかにする点は、体験初発年齢、体験に至るきっかけ、体験した回数、体験前後での変化、体験内容の開示、体験以来思い出したことがあるかどうか等である。面接内容は被面接者の了承を得て、テープに録音した。分析方法:面接内容を逐語録に起こし、定義に沿って作成したチェックシートにて筆者と大学院生とで評定する。評定内容は、自我体験とみなせるかどうか、を初めとするすべての内容についてである。

<結果・考察>60名のうち、39名から56体験の自我体験が引き出された(体験率65%)。

学年別で見ると、中1が50%、中2が67%、中3が76%となった。男女別で見るとどの学年においても、女子の方がやや体験率が高かった。体験される実態については、小学校高学年から中学の時期に、自分を対象化して見る事が可能になった上で、何のきっかけもなく体験される。形態としては、「自分は何だろう」や「自分はどこから来てどこへ行くのだろうか」といった問いかけの形で多く見られ、ある一定期間何度か体験された後、問いかけの形のまま考えなくなるというパターンが多い。というものとなった。この結果は、大学生を対象として行った天谷(1996)の調査結果とほぼ同様となった。

III. 研究2

<目的>研究2では、研究1の面接調査と同質の自我体験を引き出す質問紙を作成することを第1の目的とする。そして、研究1の面接調査での自我体験の報告と、研究2での質問紙調査による結果が一貫しているかどうかを確認することを第2の目的とする。また、自我体験の関連要因を模索すること、自我体験の報告の発達の様相を調べることも、補足的な目的とする。

<方法>質問紙:①自我体験についての項目群(自我体験項目群)—研究1の、面接調査の刺激として使用した質問紙を改訂して使用。内容的に3セクションを設定。15項目、5段階評定。②自我体験の記述的内容に関する項目群—研究1の面接調査で質問した内容をそのまま質問紙化。各セクション12項目。③関連要因についての項

目群（関連項目群）—心の動きへの敏感さ、こだわり、考え事の多さ、他人に左右されない自分なりのスタンスの4側面を想定。研究1の調査で感じた点を項目水準に引き上げた。18項目、5段階評定。対象：中学生から大学生881名（男411名、女470名）。手続き：上の質問紙を使用した質問紙調査。分析方法：自我体験を体験したかどうかは、自我体験項目群の評定と自由記述の内容による。自我体験体験群・あいまい群・誤解群・未体験群の4群に分類した。筆者と大学院生とで独立に評定を行った結果一致率は80%であった。

＜結果＞自我体験の体験率は、総合43%（男41%、女45%）となった。男女別では、中3と大学2年以外は、女子の方が体験率が高い結果となった。学年別で見ると、中2・高2でやや落ち込むが、全体としてはほぼ横ばいとなった。自我体験の体験率は、中学生の半ばまでは高くなり、それ以降はほぼ横ばいと推測される。体験される実態については、天谷（1996）や研究1の調査結果と同様のものとなった。そして、関連項目群については、因子分析の結果、3因子が抽出され、第1因子から順に、「心の動きへの関心」「自分なりのスタンス」「物事への疑問の持ちやすさ」と命名した。この3因子のうち、自我体験項目群と相関が高かったのは「心の動きへの関心」因子であった（.43, $p < .001$ ）。また、関連項目群の3因子について、自我体験体験群・あいまい群・未体験群間で、得点に差が見られるかどうかを、1要因の分散分析を行って調べた結果、「心の動きへの関心」「物事への疑問の持ちやすさ」について主効果が見られた。Tukey法による下位検定で、前者が未体験群<あいまい群<体験群、後者が未体験群<あいまい群、未体験群<体験群という結果となった。

以上から、自我体験を体験した人は、そうでない人に比し、心の動きへの関心度が高く、物事に疑問を持ちやすいこととなり、自我体験と関連していることが示された。

IV. 研究3

＜目的＞研究3では、研究2から見出された自我体験の関連要因と近い既成の概念として、自意識、社会・個人志向性、分離性を採用し、自我体験との関係を見ることを目的とする。

＜方法＞対象：中学生277名（男154名、女123名）。手続き：質問紙調査。自我体験に関しては、研究2で使用したものを改訂。関連項目群については、自意識尺度につ

いては菅原（1984）のうち15項目、社会・個人志向性については伊藤（1993）のうち12項目、分離性については山本（1988）の第1因子（自他分離）と第3因子（自己主張性）の7項目を採用。計35項目で5段階評定。分析方法：研究2と同様。

＜結果・考察＞総合の自我体験体験率は50%（男45%、女56%）となった。他の記述的内容に関する結果もすべて研究2の結果と同様のものとなった。関連項目群については、自意識、社会・個人志向性と自我体験との間に正の関連が見出された（公的自意識 .48, 私的自意識 .54, 社会志向性 .32, 個人志向性 .40, $p < .001$ ）。また、この3つの尺度について、自我体験体験群・あいまい群・未体験群で差が見られるかどうか、1要因の分散分析を行った。その結果、自意識、社会・個人志向性について、主効果が見出され、Tukey法による下位検定を行った結果、いずれも、未体験群<あいまい群、未体験群<体験群という結果となった。つまり、自意識の分化が進んでいる人、社会・個人志向性が共に発達している人が、自我体験を体験している人に多いということが示唆された。

V. 総合考察

本研究により、面接調査と質問紙調査という方法の違いを超えて、同質の自我体験を引き出すことができ、自我体験の体験される実態を把握することができた。体験率はほぼ半数程度と結論づけられる。学年別では、中学半ばまでは上昇し、その後ほぼ横ばいとなることが示された。中学半ばまでは、自我体験の実際の体験率は上昇するが、それ以降は、新たに自我体験を体験する人と自我体験を忘れてしまう人がほぼ同数存在することで、その後横ばいになると考えられる。自我体験初発年齢は小学校後半と報告されたが、この時期には認知発達、抽象思考の獲得が進む。そして、自己の思考過程そのものの認識・意識化・客観化を可能にする。そのような条件が整った上で、「ふと」自我体験が体験されるのではないかと考えられる。また、自我体験の関連要因としては、自意識、社会・個人志向性、心の動きへの関心、物事への疑問の持ちやすさが挙げられた。自意識、社会・個人志向性尺度については、発達の指標としても用いられている。これらの尺度において、自我体験体験者とそうでない人の得点間に差が認められたことから、自我体験体験者はこれらの側面でそうでない人よりも、発達分化が進んでいることが示唆された。